



国民の森林・国有林

林野庁
中部森林管理局

〒380-8575 長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



木曽の赤沢休養林でパズルラリーを団体でチャレンジ

木曽路にてパズルラリー開催中

森林に親しみ・森林の大切さを考えてみてください

主な項目	○ 木曽路にてパズルラリーを開催	P 2
	○ 各地からのたより	P 4
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P 9
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P 10

木曽路にて パズルラリーを開催

「ふれセン・木曽署・南木曽支署」

四月二十九日、木曽路の森林に親しみながら森林の大切さを理解してもらうとともに、御嶽山噴火災害の復興支援を目的として、木曽路の各遊歩道を歩きながら六個のパズルを集め、板に貼ると一枚の絵が完成する「パズルラリー」をスタートさせました。

このパズルラリーには、木曽地域六町村の各遊歩道を歩く「木曽路全域コース」と、その普及用として赤沢自然休養林内の遊歩道を対象に、短時間で完成することができる「赤沢自然休養林コース」の二つのコースを設定しました。

「赤沢自然休養林コース」では、ゴールデンウィーク中に、多い日には一日五〇名以上の方がチャレンジし、用意した六〇〇セットの内、約四割にあたる二三〇セットが終了しました。当初、夏休みまで持てばと考えていましたが、予想以上の人気で二ヶ月足らずで終了となりました。同時におこなったアンケートの結果では、ほとんどの方が「良かった」との感想で、「継続して欲しい」との意見も多く寄せられました。

木曽路全域コースについては、協賛団体である木曽地域の全町村、全観光協会、木曽観光連盟、木曽広域連合等による各地域でのチラシの配布や、協賛団体

の各ホームページから当センターのホームページにリンクしてもらう等のPR効果もあり、県内を始め関東方面や中京方面等幅広い地域の皆様方にチャレンジしていただきました。



親子でチャレンジ中

現在、赤沢自然休養林だけで渡している五〇〇番までの通し番号付きパズルも既に一四〇番代に突入するとともに、限定で一〇〇枚用意した、十二箇所全制覇達成記念賞品である、ハガキサイズの檜の板に、木曽街道六拾九次の絵を直接カラー印刷した「ミニ浮世絵」の獲得者も既に三〇名を超えました。

今後、新たにのぼり旗をコースに設置し、道の駅の情報コーナー等にチラシを置いていただき、当初の目的達成のため、PR活動を進めます。

夏休み期間中のチャレンジヤーの増加を期待しています。



チャレンジャーをお待ちしています

森林3次元計測システムを体験！ 木材生産の効率化WG

「名古屋事務所」 岐阜県森林技術開発・普及コンソーシアムは、七月一日、岐阜県美濃市岐阜県森林文化アカデミーで「平成二十八年度森林資源調査や分析の効率化ワーキンググループ第一回セミナー(WGリーダー山田貴敏)」が開催されました。

このセミナーは、木材生産の効率化を図るために林分情報を正確で効率的に把握することを目的に行われました。

セミナーには、コンソーシアムに加盟する産官学の会員ら四〇名余が集まり、行政会員である中部森林管理局からは

局、名古屋事務所、森林技術・支援センター、岐阜署から九名が参加し、座学と現地実習を行いました。

講義では、(株)アドイン研究所、(株)森林再生システムから講師を迎え、「森林3次元計測システム『OWL』」を活用した林分調査方法について、講演と実演が行われました。



現地実習風景 (45秒計測)

講演の中では、森林の蓄積や収穫量を把握するために、毎木調査や標準地調査でデータの把握が行われていますが、今日的な課題として、「計測者による誤差の発生」、「計測員の高齢化」、「低迷する木材価格に見合う調査コスト」等を挙げられ、こうした背景から今回の技術を開発したとのことでした。

これまでも空中からのリモートセンシ



現地実習風景（その場で解析）

ング技術といった広範囲の調査方法があったものの、「費用が高額」、「林内環境まで正確な調査は出来ない」等の問題点があり、筑波大学、国立研究開発法人森林総合研究所との協同開発でレーザープロファイラ（地上）技術による「森林 3 次元計測システム『OWL』」を開発したとのことでした。

この OWL の操作性は、「器械設置が容易で傾斜地でも使用可能」、「1 地点の計測時間が短い」、「軽量・コンパクト」、「ソフト操作が簡単」、「誰でも利用可能」等の特徴があり、胸高直径、樹高などの計測誤差も少なく、曲がり、立木位置、間伐率、材積、3D マップ、GPS 値などがわかることから従来の森林調

査等への活用性が期待されます。

現地実習では講師の指導を受けながら、参加者が OWL を各自体験し、その操作性と森林調査の精度を検証しました。現地実習での検証では、葉に隠れた向こうの木やツルの巻いた木の胸高直径などの判読ミスなど技術的な課題等もありましたが、今後の森林調査・収穫調査業務の抱える課題等を解消できる可能性を感じました。

今後とも岐阜県森林技術開発・普及コンソーシアムへは積極的に参画し各種ワーキンググループでフィールド・技術・情報提供等を積極的に行い、産官学連携の輪を広げていきたいと感じました。

森とどう付き合っていくべきか 名古屋大学でシンポジウムを開催

「名古屋事務所」さる七月六日、名古屋事務所に近接する名古屋学院大学において『「山の目」を前に森との付き合い方を考える』と題してシンポジウムが開催されました。

このシンポジウムは同大学の現代社会学部の主催で行われたものです。

開催にあたり、同学部の今村教授よりこのシンポジウムを通して森や木材との付き合い方から環境問題、地域再生などについて考えようという趣旨の説明がありました。

続いて情報提供として東海木材相互市

場（株）の代表鈴木和雄氏と NPO 法人「森は海の恋人」理事長畠山重篤氏の両氏の講演がありました。



講演する東海木材相互市場の鈴木氏

鈴木氏からは「コンクリート社会から緑の社会へ」戦後の政策と日本の山」と題し戦後の日本は木材資源が乏しく政策として木材消費を抑えたり、未開発森林の開発、関税撤廃による輸入材木材の利用を図ることで資源を回復する政策に重点を置いてきた。そして今日森林の資源は着実に増加し、この五十年間で森林蓄積は二・六倍となった。こうした状況を背景に最近では木造・木質化を推進するために建築基準法が改正されたり、公共建築物等木材利用促進法が施行されるなど木材を利用していくという流れに政策が変化してきた。現在の建築物を見ると住宅関係で木造率が六割程度と比較的高い水準であるが、非住宅の分野では平屋で

も木造比率一割程度であり非常に低い。公共建築物などはもっと木を使おうという方針を推進すべきである。我々木材業界もそのための努力と協力をしていきたいと話されました。

続いて演壇に立った畠山氏からは「森は海の恋人 人の心に木を植える」と題し、牡蠣養殖業の漁師による植樹活動を二十八年前から始めたが、この活動は小学校や高校の教科書でも採用されるなど、森と海は密接に繋がっていることこの理解を深めるきっかけとなったのではないかと感じている。高校の英語教科書で「森は海の恋人」をどのように英訳するかで色々な案があったことなどの裏話も紹介されました。



講演する「NPO 法人森は海の恋人」畠山氏

「The Sea Is Longing For the Forest」こんな表題で載った英語教科書を目にしたことがある方もいるのではないのでしょうか。

話は本題に戻り、二十八年前植樹活動を始めたときは「意味あるの？」と疑う学者が多かったそうですが、豊かな海に欠かせない植物プランクトンの成長、葉緑素の生成には窒素・リンと鉄分が必要なが分かり、この鉄分が森から川へ、そして海へ補充されることがその後の研究で明らかになって自分たちの活動に意味があったと再認識したとのこと。ちなみに黄砂も実は鉄分を運ぶ役割があるとの余談も紹介されました。

今では全国植樹祭の会場に大漁旗が並べられるようになるなど、自分たちの活動が森と海の距離を縮めた。今後、人々の心の豊かさに繋がればと話されていた。

両氏の講演を受けて、今村教授も含めたパネルディスカッションでは、「地域再生に山や森はどう関わるべきか」という議題についてパネラーからは、山・川・海の関係さえしつかり繋がれば田舎でも豊かに暮らせるはず。ただ政策の決定は未だに縦割りで決められることが多い。視野の狭い地域再生の取り組みが多く、繋がっているという視点で行政は取り組みを考えていただきたい。地域再生は山村や離島など小さな単位で考えてはだめ、木材関連で言うところ最近では県産材利用を推進しているが、川や道で文化はもっと広い範囲で繋がっているの、国産材利用もそのような単位で考える必要がある、等の意見が出されました。

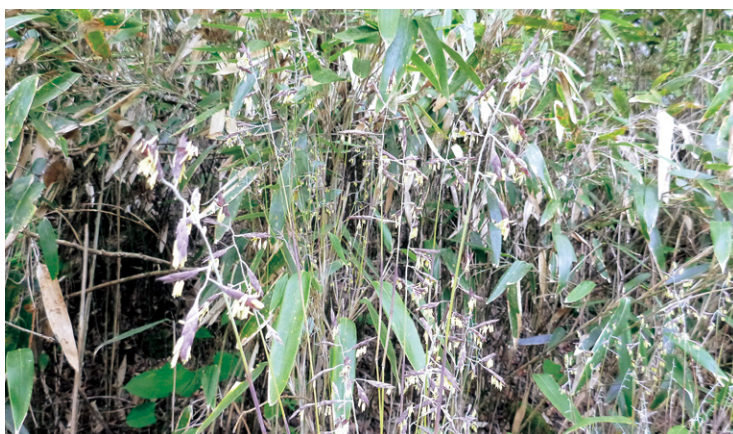


今村教授も交えパネルディスカッション

その後会場参加者から講演の感想を含めた意見等が出されました。

最後に、このシンポジウムを一つの機会として人と森との付き合い方を考えましようとして提起されシンポジウムを終えました。

表題に沿った課題提起が若干不明確であったためか、パネルディスカッションでの議論がかみ合わない場面もありましたが、参加した学生や市民それぞれが森との関係を考えるきっかけをつくるシンポジウムになったと感じました。



スズタケの開花状況

各地からのたより

「百二十年に一度」

ササ一斉開花

【愛知所】 六月十日、愛知県設楽町の段戸国有林でササの一種「スズタケ」の一斉開花が確認されました。

確認されたのは段戸国有林（約五千畝）のほぼ全域で、五月二十三日に当所職員が開花したササを見つけ、国立研究開発法人森林総合研究所に調査を依頼し、六月九日から十日に現地調査を行いました。



花の拡大

ササはイネ科の多年生植物で、黄色い雄しべと白い雌しべが咲き、花びらはなく、開花自体がまれで、実を付けて枯死します。ササの一斉開花は百二十年に一度の現象で、過去の文献にはササの実を餌に野ネズミが異常繁殖し、植えて間もないヒノキやスギに被害被害が発生した例が記録されています。

このため、当所においては今後、中部森林管理局や森林総合研究所等と連携を図る中で、野ネズミの生息調査やササが枯死した箇所における稚樹の発生状況等ササの開花が森林に及ぼす影響について調査することとしています。

朝倉川530運動に感謝状

〔愛知所〕 六月四日、豊橋市において朝倉川530大会実行委員会「NPO朝倉川育水フォーラム」から感謝状を受けました。



感謝状と豊橋森林官

今回の授与は、同NPOの平成二十八年度の総会時に、朝倉川530運動が今年で二十年目を迎えたことを踏まえ、この運動に賛同し長期にわたり参加した学校、企業、団体、自治会、行政を対象に感謝状の贈呈式が行われ、当所も十回以上参加している行政機関として感謝状を受けたものです。

豊橋市は、「530（ゴミゼロ）運動」の発祥地として知られ、この時期は市内各所で美化活動が実施されています。

朝倉川は、豊橋国有林を水源に豊橋市中心市街地へ流れる延長約八^{キロメートル}の一級河川で、今年も四月九日に二千人を超える方々が朝倉川530運動に参加し、愛



530運動中の愛知所職員

知森林管理事務所からも職員五名が参加し河川環境の美化に汗を流しました。

大会実行委員会から、本活動の成果として、開催当初はゴミ総量で五十^{トン}程あったものが、近年は一桁となり、朝倉川の生態環境も大きく改善され、昆虫類、魚介類、植物等が蘇っているとの報告がありました。

当所では、地域住民との協同作業の重要性とその効果を認識し、今後も継続してこの活動に参加することとしています。

フラワーロード事業に参加

国道二一七号線バイパス沿線

〔北信署〕 気象庁が例年より三日早い「関東甲信地方の梅雨入り」宣言後の六

月七日、勤務時間終了後、職員十三名が飯山市のフラワーロード事業で汗を流しました。

この事業は、昭和六十三年の国道二一七号線バイパス完成を機に延長二^{キロメートル}の間を花で飾ろうと始ったもので、平成十八年から西回り沿線が加わり、総延長は七^{キロメートル}にも及んでいます。

このうち、四^{キロメートル}の区間を各地区や学校、官公庁、企業等四十三団体がそれぞれ分担して花を植栽し、九月上旬まで除草などの手入れをしながら大切に育てます。県内はもとより県外から訪れた方々にも大変好評を得ており、全国的にも珍しい飯山市民が誇れる活動の一つになっています。

今年は、国道二一七号線沿と曙町には、メランポディウム（黄）、千日紅



北信署職員による植え付け



交通安全を祈って記念撮影

（赤）、西回り沿線には宿根草のシヨウメイギク（ピンク）、ガイラルディア（赤）の四種類約一万四千六〇〇本が植栽されました。

北信森林管理署が担当する三〇^{ヘクタール}区間には六〇^{ヘクタール}間隔で車道側にメランポディウム、歩道側に千日紅を各々五〇本計一〇〇本植栽しました。

梅雨明けとともに、色とりどりの花々が一斉に咲き揃い、行き交うドライバーや同乗者の心を和ませてくれることでしょう。

飯山市にお越しの際は、美しい花街道に目を奪われて事故を起こさないよう「安全運転」でお願いします。